

発達障害児者に対する運動発達アセスメントの現状と課題

過去 10 年間の国内主要文献における研究結果をもとに

○土井畑幸一郎

澤江幸則

(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

(筑波大学体育系)

KEY WORDS: 発達障害 運動発達 アセスメント

1. はじめに

体力・運動能力の評価は子どもの発育発達を捉えるために有効な指標である。このような運動能力の評価については、障害のない子ども(健常児)に関して村瀬・出村(2005)が、また身体的不器用さに関して高橋(2017)が先行研究を整理していた。しかし、障害児者の運動発達の支援を行う立場からみると、両研究とも議論の余地があると考えられた。ここで、本研究における発達支援は「アセスメント結果に基づく人の現在と将来の生活を見据えた目標の設定及び個人と個人を取り巻く環境への連続的な働きかけ(本郷, 2013)」とした。そこで本研究は、日本における発達障害児者の運動を評価した研究について整理し、日本に求められる運動発達アセスメントの現状について明らかにするとともに、今後の課題を示すことを試みた。

2. 方法

そのために、2007年1月から2017年4月までに出版された「特殊教育学研究」と「発達心理学研究」、「発達障害研究」、「体育学研究」、「アダプテッド・スポーツ科学(旧障害者スポーツ科学)」、「子どもの発育発達」兼「発育発達研究」の計6誌を調査の対象とし、発達障害児者を対象とした運動の評価に関する記載のある研究を収集した。そして、書字に関するものを除き15本の論文が抽出された。

3. 一般的な体力・運動能力テストを用いた評価

まず、最大能力を評価する体力・運動能力テストに関する論文に着目した。奥住ら(2009)は知的障害者を対象に、年齢と知能指数、身長、体重、握力、タッピング、閉眼片足立ち、遮眼片足立ち、平均台歩き、通常・最大歩行速度を調査した。また、橋本ら(2009)はダウン症児者に対して身長と体重、握力、背筋力、タッピング計測、開眼・閉眼片足立ち、光・音刺激による全身反応時間を調査した。一方、このような体力・運動能力テストについて、知的障害特別支援学校の教員は、生徒のルール理解の難しさや実施の必要性が感じられないこと、結果の活用が難しいこと、結果の妥当性の低さなどを感じていた(渡邊ら, 2014)。そのため、これらのテストは支援のための運動発達アセスメントとしては必ずしも十分であるとはいえない。

4. 運動発達アセスメントツールによる運動の評価

一方、障害児教育や療育の視点からの運動発達アセスメントとして、伊藤(1989a, 1989b)はムーブメント教育プログラムアセスメントやフロスティック視知覚発達テスト、随意運動発達検査法などを紹介していた。しかし、本研究で収集された文献において、アセスメントツールを使用した研究は、日本で標準化されていない Movement Assessment Battery for Children を用いた増田(2009)及び澤江・藤井(2013)の研究のみであった。その理由として、日本において適切な評価法が見当たらないことが挙げられていた(増田, 2009)。

5. 実践研究における運動の評価

このような現状のなか、実践研究においては研究者が独自に評価項目を設定していた。具体的には、先行研究を参考に学校の授業における投動作の発達を質的に評価した橋本ら(2009)と長曾我部(2011)、及び縄跳びの跳躍動作

の発達を関節角度に着目し量的に評価した村上(2011)の研究が挙げられた。そして、これらは運動の結果でなく動きそのものを質的・量的に評価しており、この評価の観点が日本で多く活用されていることが分かった。一方で、これらの研究が評価した運動は投動作または跳躍動作と限定的であったため、運動の発達における包括的な評価が必要であることが考えられた。

6. まとめ

以上から、日本における発達障害児者に対する運動発達アセスメントの現状として、指導・支援現場で有効な運動発達アセスメントツールに乏しく、指導者・支援者は特定の運動に対して独自の運動発達アセスメントを行っていることが示唆された。そのため、運動発達アセスメントツールの開発が早急の課題であることが考えられた。また、そのアセスメントツールの条件として、動きの過程を評価できることと、運動発達を包括的に評価できることが仮説的に挙げられた。

7. 参考文献

- 長曾我部博. (2011). 小学校特別支援学級児童の投動作の向上に関する研究. 障害者スポーツ科学, 9(1), 15-24.
- 橋本創一, 渡邊貴裕, & 尾高邦生. (2009). 知的障害児の投動作の発達過程とその援助に関する実践的研究. 特殊教育学研究, 47(1), 61-68.
- 橋本創一, 渡邊貴裕, & 尾高邦生. (2009). 知的障害児の投動作の発達過程とその援助に関する実践的研究. 特殊教育学研究, 47(1), 61-68.
- 本郷一夫. (2013). 臨床発達心理士の専門性と果たすべき役割. 発達心理学研究, 24(4), 417-425.
- 伊藤隆二. (1989a). 教育治療法ハンドブック. 福村出版.
- 伊藤隆二. (1989b). 養護訓練法ハンドブック. 福村出版.
- 増田貴人. (2009). 幼児期に現れる発達性協調運動障害の類型化について: MABC を用いた試み. 障害者スポーツ科学, 7(1), 69-77.
- 村上祐介. (2011). 発達障害児における長なわとび跳躍動作の発達段階についての研究. 体育学研究, 56(2), 507-522.
- 村瀬瀧彦, & 出村慎一. (2005). 幼児の体力・運動能力に関する測定評価研究の課題-国内の先行研究の整理と今後の検討課題. 体育測定評価研究, 5, 5-13.
- 奥住秀之, 國分充, 平田正吾, 葉石光一, 田中敦士, & 北島善夫. (2009). 知的障害者の運動能力モデルとそれに関連する属性変数. 障害者スポーツ科学, 7(1), 47-53.
- 澤江幸則, & 藤井彩乃. (2013). 自閉症スペクトラム障害のある子どもへの運動発達支援(特集 発達障害と運動支援の可能性). 子どもと発育発達, 11(3), 167-171.
- 高橋哲也. (2017). 身体的不器用さに関する研究の現状報告 -アセスメントツールの視点も含めて-. 学習開発学研究, 10, 169-178.
- 渡邊貴裕, 橋本創一, & 菅野敦. (2014). 知的障害特別支援学校の体育・スポーツ指導における体力・運動能力調査の実際と課題. 発達障害研究, 36(2), 196-208.
- (DOIHATA Koichiro, SAWAE Yukinori)